多人数会話における

関係性による視線行動の違い

傳研究室 20L1064C 鈴木ひとみ

1. はじめに

普段我々は、相手との関係性の違いによって会話の仕方を変化させる。また、相手との関係性の違いは、言語的行動のみならず非言語的行動、特に視線にも変化をもたらす。本研究では、3人以上の多人数会話において、相手との関係性が視線に対してどのような影響を及ぼすのかを研究していく。

2. 分析 1

2.1. 目的

3人会話について、参与者の一人が当該参与者との関係性が異なる2人に対して行った視線行動について「話し手時に占める視線持続時間の割合」を分析し、相手との関係性が視線行動に差異をもたらすかを確かめる。

また、各参与者の参与役割の時間と「話し手/聞き手時に占める視線持続時間」を比較し、参与役割と視線行動に関連があるかを確かめる。

2.2. 方法

<u>データ</u>

『日本語日常会話コーパス』のうち、3人会話、雑談のみの会話を 3 個選定した。また、各データの内、連続した5分間を抽出し対象とした。

<u>手続き</u>

・各参与役割の合計時間

各参与者を会話の「話し手」、「聞き手」という2つの参与役割にアノテーションし、参与役割ごとにその役割を担っていた時間を集計し、5分間における各参与役割の合計時間を各個人集計した。

・各参与役割における各相手に対する視線持続時間の割合

各参与者が他2人に対して行った視線行動について、参与者それぞれにつきアノテーションし、各参与役割における相手に対する視線持続時間の割合＝相手に対する視線維持時間の合計/各参与役割時間の合計を相手ごとに算出した。

2.3. 結果と考察

図1より各参与役割の合計時間は、K007_019は三崎、K013_013は祖母、T010_003は准において、もっとも話し手時間が長かった。この結果と各参与役割における各相手に対する視線持続時間の割合を比較すると、聞き手時においては、准を除き、話し手の時間が長い相手に対する割合

が高かった。また、話し手時においては、三崎とサブを除き、話し手の時間が長い相手に対する割合が高い又は等しかった。聞き手時は、話し手に対して視線を向けやすく、話し手時間が長い相手に視線を向ける時間が長かったと考えられる。話し手のときは会話を続けるために前話し手に対する応答が必然的に多くなり、付随して視線も前話し手に向けがちになるが、その前話し手は「話し手時間が長い相手」になりやすく、結果的に話し手時間が長い相手に対する視線行動が生じやすかったと考えられる。

図１. 各参与役割の合計時間

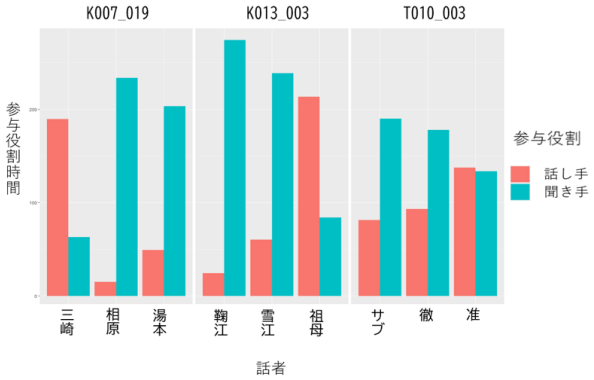


図２. 聞き手時に占める視線持続時間の割合

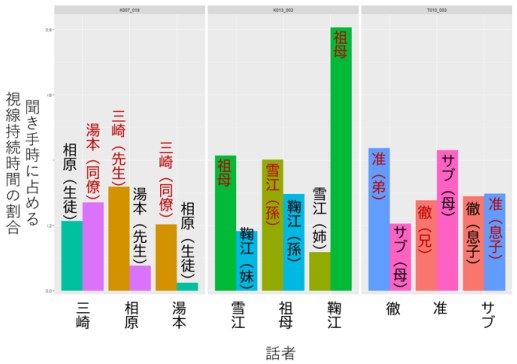
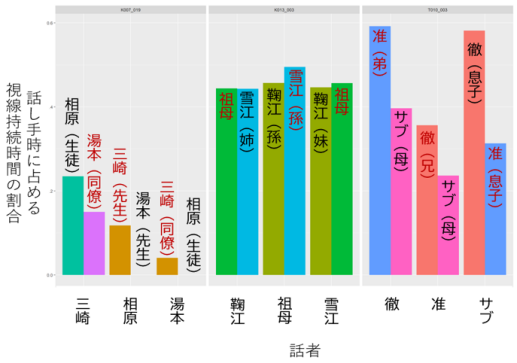


図３. 話し手時に占める視線持続時間の割合



3. 分析 2

3.1. 目的

2 章の結果より、関係性による視線行動の変化が参与役割による視線行動に対する影響に隠れている可能性が考えられた。そのため、本章では参与役割の影響を排除したうえで視線行動が相手との関係性によって変化しているのかを確かめる。また、視線行動が相手との関係性によって変化していた場合、どのような関係性が視線行動に影響を与えていたのかを明らかにする。

3.2. 方法

<u>データ</u>

『日本語日常会話コーパス』のうち、雑談のみの会話で、3 人会話を 5 個、4 人会話を 4 個選定した。また、各データの内、連続した 5 分間を抽出し対象とした。

<u>手続き</u>

注目度＝相手が話し手時における相手に対する視線維持時間/相手の話し手時間を算出し、平均注目度を相手ごとに算出した。

3.3. 結果と考察

凡例「立場」の場合、どちらも「先生・生徒」の会話について「生徒＞同僚」という傾向が会話内・会話間両方で共通してみられた。次に、「知人・友人」各会話内では同様の傾向が見られたものの、会話間では異なる傾向が見られた。そして、「客・同僚(上司部下)」という立場の関係性は、「客＞同僚」であった。

また、凡例「年齢」において、「高齢＞若齢」、の会話が 3 つ見られ、会話内・会話間で同様の傾向が見られた。

一方、「家族」の会話は、「立場」「年齢」の関係性どちらにおいても会話内・会話間で傾向が見られなかった。

このことについて、会話内・会話間両方見られた「先生・生徒」や「年齢」という関係性は、上下関係が明確であり、関係性の上下が明確なほど、一貫して傾向がみられると考えられる。

図4. 注目度（凡例：立場）

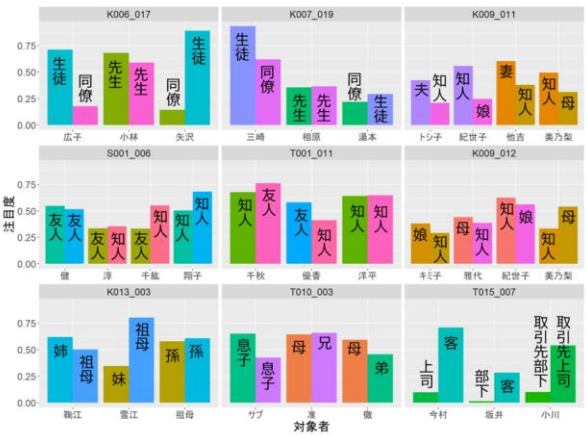
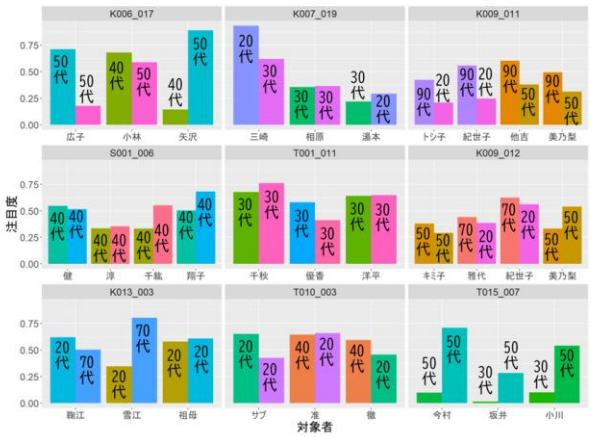


図 5. 注目度（凡例：年齢）



4. 分析 3

4.1. 目的

本章において会話データごとに事例分析を行い、会話内容と関係性の関連を調べ、成員性と視線行動に関連があるかを調査する。また、関係性と視線行動に関連がなかった「家族」において、会話内容や映像から要因を検討する。

4.2. 方法

<u>データ</u>

『日本語日常会話コーパス』のうち、雑談のみの会話で、3 人会話を 5 個、4 人会話を 4 個選定した。また、各データの内、連続した 5 分間を抽出し対象とした。

<u>手続き</u>

会話データごとに会話のテーマや各参加者が発話した内容を分析し、事例を取り上げて関係性との関連を調査した。

4.3. 結果と考察

「先生・生徒・同僚」の会話においては、会話内容から生じる参与者の構図が「先生⇔生徒」であった。このことから、会話に内容に応じた対立構造（成員性）が自然に影響を与えていると考えられる。

「知人・友人」の会話においては、会話内容や状況によって重要視される立場が異なった（友人 ≦ 知人）一方で、生じた構図は会話全体を通して一貫していた。また「年齢」によって視線行動に変化があった会話においては、会話内容の変化に応じて重要視される年齢が会話中に変化していた。このことから、「知人・友人」「年齢」の会話においては、立場や年齢のような固定的な関係でなく会話内容に起因する成員性が視線行動に影響を与えていると考えられる。

最後に、「家族」の会話においては、参加者の癖が顕著であった。このことについて、自由に振舞えることほどに関係性・成員性が重要視されず、関係性により視線行動が変化しなかったと考えられる。